

グリム童話における女性と結婚

柳 泉

1. はじめに

グリム兄弟 (Jacob Grimm 1785-1863, Wilhelm Grimm 1786-1859) の『子供と家庭の童話集』(Kinder- und Hausmärchen 1812) の中でよく知られているメルヒェンと言えば、「白雪姫」、「いばら姫」、「灰かぶり」など女性主人公が結婚するメルヒェンがまず挙げられる。

拙論「グリムとベヒシュタインの『白雪姫』における心理描写について」¹⁾において、登場人物の心理描写からグリムとベヒシュタイン (Ludwig Bechstein 1801-1860) の「白雪姫」を比較、考察した際に、グリム兄弟の「白雪姫」で、王子からプロポーズを受けた白雪姫の心理状態が描写されていることを確認した。

Da war ihm Sneewittchen gut

これをきいて、雪白姫も王子を愛しく思っ……²⁾

メルヒェンの心理描写について、マックス・リュティ (Max Lüthi 1909-1991) は次のように述べている。

Eigenschaften und Gefühle sprechen sich in Handlungen aus Die Gefühlswelt als solche fehlt der Märchenfigur, und damit geht ihr seelische jede Tiefe ab.

(メルヒェンの登場人物の) 性質や感情は、話の筋の中で表現される。……メルヒェンの登場人物には感情的世界そのものが欠けており、したがって、いかなる精神的奥行きもない。³⁾

とは言え、グリムのメルヒェンでは登場人物の心理状態が描写されている。「白雪姫」では、王子のプロポーズを受けた白雪姫の感情が語られており、恋愛感情が王子との結婚を承諾する理由として述べられている。白雪姫のように、メルヒェンの女性主人公は皆、好きになったからという理由で結婚するのであろうか。本論文では、女性主人公が結婚する理由を心理描写から読み取り、結婚をめぐる女性主人公の心理表現について考察する。

2. 対象となるメルヒェンについて

『子供と家庭の童話集』には200話のメルヒェンが収録されている。⁴⁾ 200話のうち、女性が主人公として登場するメルヒェンは、男女とも主人公のメルヒェン7話を含めて60話である。

本論文では、結婚を受け入れる女性の心理状態をテーマにしているので、「白雪姫」のように主人公が未婚女性で結婚するメルヒェンを対象とすることになる。女性主人公のメルヒェン60話のうち、未婚女性が主人公のメルヒェンは52話、既婚女性が主人公のメルヒェンは8話である。

52話の未婚女性のメルヒェンのうち、主人公が結婚するのは34話である。ここから、結婚を約束した恋人や婚約者がいる未婚の女性主人公のメルヒェン6話⁵⁾を除く。

したがって対象となるメルヒェンは次の28話である。

「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」

(Der Froschkönig oder der eiserne Heinrich, KHM1)

「マリアの子供」(Marienkind, KHM3)

「12人兄弟」(Die zwölf Brüder, KHM9)

「兄と妹」(Büderchen und Schwesterchen, KHM11)

「ラプンツェル」(Rapunzel, KHM12)

「森の中の3人の小人」(Die drei Männlein im Walde, KHM13)

「3人の糸紡ぎ女」(Die drei Spinnerinnen, KHM14)

「灰かぶり」(Aschenputtel, KHM21)

「手なし娘」(Das Mädchen ohne Hände, KHM31)

「賢いエルゼ」(Die kluge Else, KHM34)

「6羽の白鳥」(Die sechs Schwäne, KHM49)

「いばら姫」(Dornröschen, KHM50)

「つぐみの髭の王様」(Der König Drosselbart, KHM52)
「白雪姫」(Schneewittchen, KHM53)
「ルンベルシュティルツヒェン」(Rumpelstilzchen, KHM55)
「千匹皮」(Allerleirauh, KHM65)
「鳴いて跳ねるひばり」
(Das singende springende Löweneckerchen, KHM88)
「賢い百姓娘」(Die kluge Bauerntochter, KHM94)
「3羽の小鳥」(De drei Vügelkens, KHM96)
「森の中のおばあさん」(Die Alte im Walde, KHM123)
「鉄のストーブ」(Der Eisenofen, KHM127)
「1つ目, 2つ目, 3つ目」
(Einäuglein, Zweiäuglein, Dreiäuglein, KHM130)
「白い花嫁と黒い花嫁」
(Die weiße und die schwarze Braut, KHM135)
「雪白とばら赤」(Schneeweißchen und Rosenrot, KHM161)
「森の家」(Das Waldhaus, KHM169)
「本当の花嫁」(Die wahre Braut, KHM186)
「錘と杵と縫い針」
(Spindel, Weberschiffchen und Nadel, KHM188)
「あめふらし」(Das Meerhäschen, KHM191)⁶⁾

3. テキストと心理描写について

『子供と家庭の童話集』は、初版第1巻が1812年に、初版第2巻が1815年に出版された。2つの巻に分かれていた『童話集』は、第2版(1819年)以降1冊にまとまり、グリム兄弟の生前は第7版(1857年)まで出版されている。ここでは第7版のテキスト „Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1, 2, 3.“ (1984) を使用する。引用の際は、ページを付記する。

考察の対象となる場面は、女性主人公がプロポーズされた時、結婚の話が持ち上がった時など、女性主人公が結婚に直面する場面である。

女性主人公の心理描写を規定する手がかりとしては、Dornseiff: „Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen“ (2004) による感情 (Fühlen, Affekte,

Charaktereigenschaften) のグループ⁷⁾ および思考 (Das Denken) のグループ⁸⁾ に分類されている言葉と, Helbig/Buscha: „Deutsche Grammatik“ (1996) による発話導入動詞 (Redeeinleitende Verben) の思考・感情型動詞 (Verben des Denkens und Fühlens) として挙げられている動詞⁹⁾ を参考にする。引用の際, 手がかりとなるこれらの言葉が含まれている文章を下線で示し, 拙訳を付記する。

4. 結婚を前にした女性主人公の心理描写

対象としている 28 話のメルヒェンのうち, 結婚を前にした女性主人公の心理描写が確認できたのは次の 8 話である。

- ①「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」
- ②「ラブンツェル」
- ③「森の中の 3 人の小人」
- ④「つぐみの髭の王様」
- ⑤「白雪姫」
- ⑥「鉄のストーブ」
- ⑦「白い花嫁と黒い花嫁」
- ⑧「本当の花嫁」

この 8 話のうち「蛙の王様 または鉄のハインリヒ」と「つぐみの髭の王様」の主人公は父の意向で結婚する。主人公本人の意志あるいは判断による結婚ではないため, この 2 話は除外することにする。

残りの 6 話のメルヒェンの主人公は, 自分の意志あるいは判断で結婚することを決める。女性主人公の心理描写から浮かび上がった 2 つの結婚理由に分けて見ていくことにする。

1) 好意からの結婚 (3 話)

好意が理由で結婚するのは, ⑤「白雪姫」, ⑥「鉄のストーブ」, ⑧「本当の花嫁」の主人公である。まずは結婚を前にした 3 人の女性主人公の心理描写を引用する。

⑤ 「白雪姫」

»Ach Gott, wo bin ich?« rief es. Der König sagte voll Freude: »Du bist bei mir«, und erzählte, was sich zugetragen hatte, und sprach: »Ich habe dich lieber als alles auf der Welt; komm mit mir in meines Vaters Schloß, du sollst meine Gemahlin werden.« Da war ihm Schneewittchen gut und ging mit ihm, und ihre Hochzeit ward mit großer Pracht und Herrlichkeit angeordnet. (Bd. 1, S. 310)

「ああ、神様、ここはどこ？」と白雪姫は叫んだ。王様は、嬉しきでいっぱいになり、「君は僕のそばにいるんだよ。」と言ひ、何があつたのかを語つた。そして、「僕は君を世界中の何よりも愛するよ。僕と一緒に父のお城へ行って、私の妻になってほしい。」と話した。すると白雪姫は王子のことが好きになり、王子と一緒に行き、2人の結婚式が豪華にそして素晴らしく整えられた。

⑥ 「鉄のストーブ」

Da sprach's aus dem Eisenofen: »ich will dir wieder nach Haus verhelfen und zwar in einer kurzen Zeit, wenn du willst unterschreiben zu tun, was ich verlange. Ich bin ein größerer Königssohn als du eine Königstochter und will dich heiraten.« Da erschrak sie und dachte: »lieber Gott, was soll ich mit dem Eisenofen anfangen!« Weil sie aber gerne wieder zu ihrem Vater heim wollte, unterschrieb sie sich doch zu tun, was er verlangte. (Bd. 2, S. 315)

その時、鉄のストーブの中から話しかけられた。「僕は君がまた家に帰れるよう手助けするつもりだよ。君が僕の言うことを聞くと約束するのならすぐにでもね。僕は王女の君よりも大きな国の王子で、君と結婚したいんだ。」すると王女は驚き、「神様、鉄のストーブと結婚なんて、私はどうすれば良いのでしょうか！」と思った。しかし王女はどうしても父親のいる家に帰りたいかったので、王子の言うことを聞くと約束したのだった。

Da guckte sie hinein und sah einen so schönen Jüngling, ach, der glimmerte in Gold und Edelsteinen, daß er ihr recht in der Seele gefiel. Nun, da schrappte sie noch weiter fort und machte das Loch so groß, daß er herauskonnte. (Bd. 2, S. 317)

そこで王女が中を覗き込むと、1人のあまりにも美しい若者が、ああ、金や宝石を身に付けてきらきらびやかな若者が見え、王女は本当に心からこ

の王子のことを気に入ったのだった。そこで王女が再び削り続け、大きな穴を開けると、王子は中から出て来ることができたのだった。

⑧「本当の花嫁」

Alle Tage meldeten sich Freier, aber keiner gefiel ihr. Endlich kam auch der Sohn eines Königs, der ihr Herz zu rühren wußte, und sie verlobte sich mit ihm. (Bd. 3, S. 193)

毎日、求婚者がやって来たのだが、誰1人、娘の気に入る人はいなかった。とうとうある王様の息子もやって来て、その王子が娘の心を動かし、娘はその王子と婚約したのだった。

3話のメルヒェンの主人公の感情と行動を追ってみると、白雪姫は、王子からプロポーズを受けて、王子のことが好きになり (gut), 王子と一緒に (王子の国へ) 行く。

森で道に迷った「鉄のストーブ」の王女は、鉄のストーブに求婚されて驚き (erschrak), 「神様、鉄のストーブと結婚だなんてどうすれば良いのでしょうか？」と思う (dachte) が、家に帰りたかった (wollte) ので、鉄のストーブの求婚を受け入れる。その後、美しい王子を見て、王女は王子のことが気に入り (gefiel), 鉄のストーブを削り続けて王子を救い出す。

「本当の花嫁」では、1人の王子が主人公のところへやって来て主人公の心を動かし (Herz zu rühren), 2人は婚約する。

本来のメルヒェンでは、登場人物の心理状態は行動で表されるため、「白雪姫」であれば王子と一緒にいった (ging) という白雪姫の行動を、「鉄のストーブ」であれば王女がストーブを削った (schrappte) という行動を、「本当の花嫁」であれば婚約した (sich verlobte) という行動を述べるのが本来のメルヒェンの語り方である。3人の主人公の恋愛感情を語ることで、彼女たちが結婚する理由を読者に明確に示している。その結果、恋愛感情は、先に述べたように、次の行動の動機としての機能を持つことになる。すなわち、王子の国へ行くこと、婚約すること、ストーブを削ること、これらの行動の動機として機能しているのである。

また、恋愛感情は、結婚理由と次の行動の動機の他に、「鉄のストーブ」と「本当の花嫁」においては、話の展開により深く関わっている。「鉄の

ストーブ」では、王女はストーブの中から王子を救い出した後、父親に挨拶をするために1人で家に帰る。「本当の花嫁」でも、2人が婚約した後、王子が父親に話をするために家へ帰り、どちらもすぐには結婚しない。結婚するまでに紆余曲折があり、恋愛感情は、主人公が結婚までの困難を乗り越えるための動機ともなっている。

2) 結婚した方が今の状態より良いと判断しての結婚 (3話)

今の生活よりも良くなると判断して結婚する主人公が登場するメルヒェンは、②「ラプンツェル」、③「森の中の3人の小人」、⑦「白い花嫁と黒い花嫁」の3話である。まずは3人の女性主人公の心理描写を引用する。

②「ラプンツェル」

Da verlor Rapunzel ihre Angst, und als sie er fragte, ob sie ihn zum Manne nehmen wollte, und sie sah, daß er jung und schön war, so dachte sie: »der wird mich lieber haben als die alte Frau Gothel«, und sagte ja und legte ihre Hand in seine Hand. Sie sprach: »ich will gerne mit dir gehen, aber ich weiß nicht, wie ich herabkommen kann. Wenn du kommst, so bring jedesmal einen Strang Seide mit; daraus will ich eine Leiter flechten, und wenn die fertig ist, so steige ich herunter, und du nimmst mich auf dein Pferd.« (Bd. 1, S. 101)

するとラプンツェルの不安は消え去り、その男性がラプンツェルに、自分を夫にしてくれないかと尋ねた時、ラプンツェルはその男性が若くて美しいのを見て、「この人はゴテルおばさんよりも私をかわいがってくれそうだよ。」と思い、はいと言って自分の手を男性の手に置いたのだった。ラプンツェルは、「私は喜んであなたと一緒にいきたいと思えます。ですが、どうすればここから降りることができるのか、私にはわかりません。あなたがいらっしゃる時にはいつも1本の絹紐を持って来てください。それで私は梯子を編みます。梯子が出来上がったら、私は下へ降ります。私をあなたの馬に乗せてください。」と話した。

③「森の中の3人の小人」

Da fühlte der König Mitleiden, und als er sah, wie es so gar schön war, sprach er: »Willst du mit mir fahren?« »Ach ja, von Herzen gern«, antwortete es; denn es

war froh, daß es der Mutter und Schwester aus den Augen kommen sollte. Also stieg es in den Wagen und fuhr mit dem König fort, und als sie auf sein Schloß gekommen waren, ward die Hochzeit mit großer Pracht gefeiert, wie es die kleinen Männlein dem Mädchen geschenkt hatten. (Bd. 1, S. 107)

すると王様は同情し、とても美しい娘を見て、「私と一緒に来ないか？」と話した。「はい、心から喜んで。」と娘は答えた。というのは、娘は自分が母親や姉の目に入らなくなることが嬉しかったからだった。そして娘は馬車に乗って王様と一緒に行き、2人が王様のお城に着くと、結婚式が豪華に執り行われた。王様との結婚は、小人たちが娘に贈ったものだった。

⑦「白い花嫁と黒い花嫁」

Der Kutscher sagte, es wäre seine Schwester, so entschloß sich der König, keine andere als diese zur Gemahlin zu nehmen, gab ihm Wagen und Pferde und prächtige Goldkleider und schickte ihn seine erwählte Braut abzuholen. Wie Reginer mit der Botschaft ankam, freute sich seine Schwester, allein die Schwarze war eifersüchtig auf das Glück, ärgerte sich über alle Maßen und sprach zu ihrer Mutter: »was helfen nun all Eure Künste, da Ihr mir ein solches Glück doch nicht verschaffen könnt.« (Bd. 3, S. 26)

御者は、それは私の妹です、と言った。王様は、この娘以外誰も妻にはしないと心に決めて、御者に車と馬と豪華な金のドレスを持たせて、自分が選んだ花嫁を連れて来るよう御者を行かせた。レギーネルがこの知らせを持ってやって来ると、妹は喜んだ。しかし、黒い娘はこの幸せを妬み、ひどく腹を立てて母親に話した。「お母さんの魔術は何の役にも立たないじゃないの。だって、私にこういう幸運を作ってはくれないんだもの。」

ラプンツェルは王子からの求婚を受けて、「この人はゴテルおばさんよりも私をかわいがってくれそうだわ。」と考える (dachte)。ラプンツェルは塔の上での今の生活よりも王子と暮らす方が良さそうだと考えて王子との結婚を承諾するのである。動詞 denken は、先に取り上げた「鉄のストーブ」でも、鉄のストーブから求婚された王女の思考を表現するために用いられている。王女とラプンツェルの思考内容は、denken に導かれて直接話法で語られている。すなわち語り手が主人公の声で主人公の思考内容を

伝えているのである。グリム童話では、主に *sprechen* で導かれて登場人物同士の会話が直接話法で表現されている。それに対して、*denken* に導かれた直接話法での思考内容、言い換えれば主人公の心の声は、読者に直接語りかけるものである。登場人物が読者に話しかけるといふこの叙述の仕方は、読者に主人公を精神的奥行きのある人物として提示するとともに、読者を話の世界に引き込む効果もあるのではないかと。

「森の中の3人の小人」と「白い花嫁と黒い花嫁」の主人公は置かれている境遇も、結婚を前にした時の感情を表す言葉もほぼ同じである。境遇に関しては、どちら継母とその娘との3人暮らしで、辛い生活を送っている。「森の中の3人の小人」の主人公は、継母の命令で氷の張った川で糸をすすがなければならず、「白い花嫁と黒い花嫁」の継母は美しい主人公を痛めつけることばかり考えている¹⁰⁾。結婚を前にした2人の心理状態を見てみると、「森の中の3人の小人」の主人公は嬉しく思う (*froh*)。なぜなら、結婚すれば継母とその娘の目の届かないところに行けるからである。「白い花嫁と黒い花嫁」の主人公も、兄のレギーネルが結婚の知らせを持ってやって来ると、喜ぶ (*sich freute*)。妹が喜んだ理由については述べられていないが、「森の中の3人の小人」の主人公の境遇および心理状態との類似性を鑑みると、「白い花嫁と黒い花嫁」の主人公である妹もまた結婚によって意地悪な継母たちとの辛い生活から抜け出せることを喜んでいると解釈できる。2人とも、今の暮らしよりも良くなるから結婚するのである。

5. 終わりに

結婚を前にした女性主人公の心理描写から、2つの結婚理由が浮かび上がった。好きになったからという理由と今の生活よりも良くなるからという理由である。

恋愛感情で結婚するのは、「白雪姫」、「鉄のストーブ」、「本当の花嫁」の主人公である。一方、生活改善のために結婚するのは、「ラプンツェル」、「森の中の3人の小人」、「白い花嫁と黒い花嫁」の主人公である。

結婚を前にした女性主人公の心理描写は、彼女たちが結婚する理由を読者に明示する。そのうえ、恋愛感情は主人公の次の行動の動機としても機能している。特に、「鉄のストーブ」と「本当の花嫁」では、結婚するまでの困難を乗り越えるための動機としての役割を、すなわち話を展開させ

るための大きな役割を持っていることを確認した。

結婚理由にかかわらず、「鉄のストーブ」と「ラプンツェル」では、結婚を前にした主人公の思考内容が、denkenを用いて直接話法で表現されていることも確認した。語り手が、主人公の思考内容を語り手の視点から伝えるのではなく、主人公の声で伝えている。メルヒェンの登場人物、それも主人公が読者に語りかけるような叙述の仕方は、読者をメルヒェンの世界に引き込む効果もあるのではないだろうか。

また、生活改善が理由で結婚する主人公のメルヒェンでは、「森の中の3人の小人」と「白い花嫁と黒い花嫁」において主人公の境遇と心理状態を表す言葉に類似性が見られた。継母とその娘との辛い生活、そして嬉しく思う (froh) 気持ちと喜ぶ (sich freute) 気持ちである。「森の中の3人の小人」では、主人公の心理状態に続いて、その心理状態に至る理由も述べられている。初版では、「森の中の3人の小人」の主人公が結婚を嬉しく思う気持ちもその理由も述べられていない。一方、「白い花嫁と黒い花嫁」の主人公の心理状態は、初版から叙述されている。「森の中の3人の小人」の主人公の心理状態とその理由が、第2版以降、書き加えられたのは、初版から心理描写のあった「白い花嫁と黒い花嫁」の影響が考えられる。その結果、同じような境遇を持つ主人公の感情が統一されたのであるとすれば、『童話集』を担当していたヴィルヘルムによる¹¹⁾メルヒェンの書き換えは、結婚を前にした女性主人公の心理描写の統一化にも及んだと言えるのではないか。この点については今後の課題としたい。

注

- 1) 桜門ドイツ文学会『リェンコイス』第51号 2018年 1-12ページ。
- 2) 原文: Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1. Frankfurt am Main 1984. S. 310.
訳文: 金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』(二) 146ページ。
- 3) Lüthi, S. 15. 和訳の括弧内は筆者によるものである。
- 4) 『子供と家庭の童話集』には、151番が2つあるため厳密には201話であるが、『童話集』の最後に収録されているメルヒェンの番号が200番であるので、ここでは200話とする。
- 5) 「恋人ローラント」(Der Liebste Loland, KHM 56), 「12人の狩人」(Die zwölf

- Jäger, KHM67), 「ヨリンデとヨリングル」(Jorinde und Joringel, KHM69), 「がちょう番の女」(Die Gänsemagd, KHM89), 「リンクランクじいさん」(Oll Rinkrank, KHM196), 「マレーン姫」(Jungfrau Maleen, KHM198) の 6 話である。
- 6) KHM とは Kinder- und Hausmärchen の省略であり、番号は第 7 版の収録順を示すものである。
 - 7) Dornseiff, S.169-195.
 - 8) Dornseiff, S.197-217.
 - 9) Helbig/Buscha, S. 197.
 - 10)so stieg die Bosheit in ihrem Herzen noch höher, und sie hatte nichts anders im Sinn, als wie sie ihr ein Leid antun könnte. (Bd. 3. S. 26) 意地悪な気持ちが継母の心の中でぐんぐん高くなっていき、どうすれば義理の娘に苦痛を与えられるかということばかり考えていた。
 - 11) Kinder- und Hausmärchen (1982), S. 525.

使用テキスト

- 初 版 : Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. Erstdruckfassung 1812-1815. Eschborn bei Frankfurt am Main 1999.
- 第 2 版 : Kinder- und Hausmärchen. Nach der zweiten vermehrten und verbesserten Auflage von 1819, textkritisch revidiert und mit einer Biographie der Grimmschen Märchen versehen. Köln 1982.
- 第 7 版 : Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Bd. 1-3. Frankfurt am Main 1984. (金田鬼一訳『完訳 グリム童話集』(一)～(五) 岩波書店 1996年[第一巻], 1997年[第二巻], 1999年[第三巻], 1997年[第四巻], 1985年[第五巻])

参考文献

- Dornseiff, Franz: Der deutsche Wortschatz nach Sachgruppen. 8. Auflage. Berlin 2004.
- Helbig, Gerhard/Buscha, Joahim: Deutsche Grammatik. 17. Auflage. Leipzig 1996. (G. ヘルビヒ / J. ブッシャ 在間進訳: 現代ドイツ文法 三修社 1991年)
- Lüthi, Max: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen. 2. Auflage. Bern 1960.
- Uther, Hans-Jörg: Handbuch zu den »Kinder- und Hausmärchen« der Brüder Grimm. Berlin 2008.